

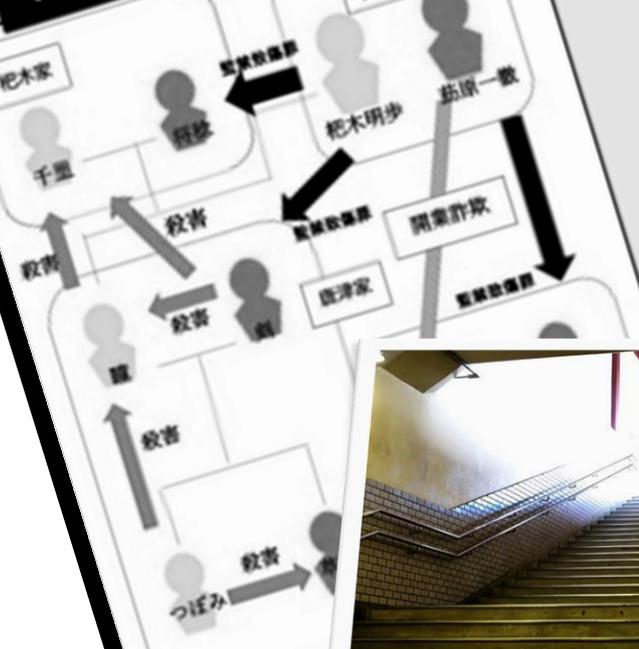
海豚島監禁殺人事件

三家族が監禁され 殺し合い

日本史上稀に見る残酷な事件が二〇××年に発覚した。警察は、当時十歳の少女が監禁先から逃げ出し、警察とからだった。

犯人は両原一徹被告
明歩被告の二人
の同級生で、
二十九歳と
許成

マインドコントロール



空き家を掃除したら、 幽霊に犯された話

待て、ドコントロール口止め料・慰謝料と様々な名目で、要求されるようになる。は消費者金融や開業、親戚の人などから借金して金を渡すし、その総額は少なくとも



valencia

(サンプル)

※体験版の為途中からとなります。

腰をゆっくりと回転させて、押し込んだ性器を強調するように、グルリと内壁へ擦りつけられる。じれったいような感覚が、その場所から沸き起こってくるのを感じていた。接合部分でビチャビチャと湿った音が鳴って、いやらしく感じられる。

「よく言うぜ、ここをこんなに水びだしにしておいて……だいたい、誘ってない奴が、なんでパンツも履かずに、あんな恰好で立っていたんだ？　俺が来るのを待ってたんだろうが」

「違う……それは、たまたま……」

言いかけて言葉に詰まった。たまたま……なんだろう。

そういう俺は、なぜ下着を履いていなかったのだろうか。寝惚けて忘れたのだと思っていたが、果たしてそれだけなのか、俺はわからなくなっていた。肛門に男を受け入れ、強く突かれながら乱れて、自分がそうされたくなかったと、俺は果た

して言い切れるのか。

「何しろ、親戚のオヤジにここを掘られて気持ち良くなったぐらいだもんな。しかもそのあと、自分でひっかきまわしながら、オナっていたんだろう？ 淫乱な坊やは好きだぜ……」

「やめ……ああああ……はあん……っ」

腰を打ちつけながら首筋を舐められ、声が止まらなくなる。

「イきたいか？ さっきからここが、ビンビンに反り返って弾けたそうに見える」
「や……触らないで……だ、だめっ……ああああんっ！」

苜原（あざみばる）が俺の物を握り、先端を親指で擦った。同時に空いた掌で袋を包み、玉を転がされる。三カ所を同時に責められて、気が狂うような快感に、意識が飛びそうになった。だが、もう少しでイけると思った瞬間、根元を強く押さえられて俺は焦れったくなる。

爬虫類のような気味の悪い視線で俺を見下ろし、苜原が冷酷に笑っていた。

「な……なんで……？」

「もつと気持ちよくしてやるから、待ってな」

そういうと昉原が腰を引き、彼の性器が俺の中から出て行こうとする。俺は反射的に、尻へ力を入れていた。

「や……あ……」

恨みがましい気分で、彼を睨み上げる。無意識の動作だったが、俺は受け入れている場所で、昉原の物を締めつけていたのだ。

「おいおい、何の真似だ？ お前はそんなに俺のコイツが気に入ったのか。どうしようもないエロガキだな。……まあ、待ってなって。もつと良くしてやるから」

昉原はそう言って、からかうように軽く俺の頬を叩くと、すっと腰を引き抜く。続いて、納屋の中をあちこち物色するような音が聞こえた。

一人にされて、改めてわかったが、俺は地面に寝ていたのではなく、固い木材の上に古いカーテンか着物のような生地を広げて、その上に寝かされていた。着ていた浴衣はまだ腕を通していたが、すべて肩の周りに絡まっており、胸から下は完全に裸だ。どうやら一度射精したらしく、腹の上に自分で出したのであろう精液らし

き雫が乗って、入り口から射し込む月明かりに光っている。

無意識に台の側面を手で探り、艶のある布越しに金具の存在を発見する。肘を突きながら改めて台を確認してみると、上に掛けられていた古い反物の切れ目から、漆塗りに金箔貼りの紋の一部が見えた。それは杷木の家紋が入った長持だったのだ。つまり昼間、加部島星也（かべしま せいや）が丁寧に乾拭きし、曇りをとって漆の輝きを蘇らせてくれていた、あの古い家具である。そこで俺は、よく知らない男に身を任せていたのだ。

やっと、星也と心が通じあいはじめたばかりだというのに。

「待たせたな」

戻って来た昉原が手に持っているものは、マッサージャー。

「それ……どうする気……」

昼間、俺が揶揄われ、その後嬉野龍斗（うれしの りゅうと）が手に持ち、遠賀瑛太（おんが えいた）を誘っていた、あれである。しかし、入れっぱなしになっていた電池が液漏れを起こし、動かなかった筈だ。

「どうするも、こうするも、マッサージに決まってるだろう」

そう言いつつ、昉原がカチリとスイッチを入れる。すぐに力強いモーターの回転音が聞こえて、俺は仰天した。

「嘘だろ!?! 確か壊れていたのに……ちよ……ちよ……ちよ……あつ、ああんっ!」

再び尻を高く上げられて、昉原が腰を押し付けてくる。改めてまじまじと観察したが、昉原の性器は叔父とは比べ物にならないほど立派なものだった。あんなものを俺は受け入れて、よがっていたのかと我ながら呆れる。

難なく昉原のペニスを根元まで受け入れ、さらに勃起した俺の陰茎には、ブルブルとボールが激しく振動しているマッサージャーをぐいぐいと押し付けられた。

「おっと、凄い閉まり具合だな……そっちも気持ち良くて、ぶっ飛んでしまいそうなんじゃないか?」

「やああああん……ああああん……や、やめてえええ……ひっい……つくっとうう」意識が飛びそうに気持ち良かった。到底動力が単三電池とは思えぬそれは、まる

でACアダプターで直接百ボルト交流を受けているかのようにパワフルで、凄まじい振動を伝えてくる。そんなもので性器を責められ、大きな筋原の勃起で中を満たされて、俺は気が狂わんばかりに感じていた。

同時に覚えのある感覚が兆して、焦りはじめた。そもそも俺は、風呂上がりに水を一杯飲んだところで筋原に捕まっていたのだ。その水分が、そろそろ尿意に変わりつつあった。これ以上刺激されると不味いことになる。

「やめてじゃなくて、もつと悦くしての間違いだろう？ ご希望どおり、めっちゃくちゃにイかせてやるよ……そらっ！」

「だっ……だめっ……！」

掛け声とともに筋原が腰を使い始める。ペニスにはマッサージャーの強い振動が、中からは勃起した筋原の大きな性器が、容赦なく俺の性感帯を刺激した。

「腰振ってよがりやがって、この淫乱め……」

「あっ……だめっ……あああっ……やっ……あああんっ……でっ……でちゃっ……だめええっ！」

俺はどうとう失禁した。

「ほほう……こいつはいい！」

「はあ……ああん……ああ……」

昉原の物を受け入れたまま、性器に押しあてられたマッサージャーを、ビシヤビシヤと濡らしつつ、星也が綺麗にしてくれた家紋入りの長持を汚して、祖母か誰かの着物を台無しにして……。

「そんなに気持ち良かったのか？ だろうな、呆けた顔見てりやわかる。涎まで垂らしやがって」

「はあ……あ……あ……」

言葉も出て来ない。生まれて初めて経験する、強烈な快感だった。手足のしびれが、なかなか止まらず……指の腹で頬を拭われて、自分が泣いていたと気付かされた。

「次は俺だ。イかせてもらうぜ」

昉原が本格的に腰を使い始め、俺は再び身体を揺り動かされる。そのまま彼が何

度達して、自分でもどのぐらい果てたものか。

次に目が覚めたときには、俺は一人納屋で取り残され、全裸で長持に横たわっていた。情けなくも失禁した痕跡はしつかりと残っていたのだが、どういうわけか、再び深いダメージを負っていきそうな肛門に、何か変化があるとは思えなかった。それでも確かに交わった感覚と受けた痛みや沸き起こった快感は、生々しく肌に残っていて、とてもあれが夢だとは思えない。

長持から足を下ろした瞬間、身体がふらつき、反射的に手を突く。叔父に犯された直後と同じ感覚だった。昉原とセックスしたことは、やはり間違いないのだから。

鈍い痛みが残る腰を庇いながら、長持の周りを見渡し、首を傾げつつ、昨夜昉原が引つ掻きまわしていた辺りを確認する。そして、古びたダンボールのなかからマッサージャーを手にとって、スイッチを入れてみた。機械はびくともしない。

「そんな馬鹿な」

持ち手部分の蓋を開けて、中で錆び付いている二本の単三電池を再確認して混

乱し、それ以上に、その機械を持っている自分の手を見て愕然とした。

「なんだ、これ……」

指の付け根から爪の先に至るまで、べったりと付着したごわつく汚れ……乾いた土だろう。爪の際や中にまで黒い塊が入りこみ、ところどころ、指先の皮膚が裂けて出血している。まるで夜中じゅう、どこかの地面でも引っ搔いていたようだ。

この日俺は、星也とまともに目を合わせる勇気がなかった。